

I

5 10 15 20 25

5 6世紀、ビザンツ帝国のユスティニアヌスは、皇帝権の神聖化を図り、都のコンスタンティノーブルにハギア・ソフィア聖堂をビザンツ様式で再建し、ローマ帝国の旧領土を回復してその威光を示した。8世紀前半にレオン

10 3世が、偶像崇拝を厳禁するイスラーム勢力への対抗として聖像禁止令を出したことから、モザイク画も破壊された。しかし、9世紀半ばに禁止令が解かれると再びモザイク画がつくられ、「破壊された図像をここに取り戻す」という銘文も刻まれ、聖堂はギリシア正教会の中心として宗教的威光を保持した。15世紀半ば、ビザンツ帝国を滅ぼしたオスマン帝国の支配下に入ると、聖堂にはミナレットなどが付設されてアヤ・ソフィア・モスクへと転用され、モザイク画は再度埋められた。第一次世界

15 大戦後、ムスタファ＝ケマルがオスマン帝国を滅ぼし、新たに成立したトルコ共和国では政教分離政策が推進され、モスクから博物館へ転用した。

II

5 10 15 20 25

「レンブラント時代」のオランダはスペインから独立を果たし、国際貿易で繁栄していた。同時代のフランス・スペインでは王侯の権威を誇示する豪華なバロックの歴史画などが発展したのに対し、オランダは商人貴族が支配する共和国で、宗教的寛容の風潮のもと富裕な市民団を中心に国際的な文化が花開き、レンブラントは市民を相手に日常を題材とした肖像画を制作した。「ゲーテの時代」のドイツでは、フランスの古典主義演劇やフランス語などの宮廷文化、ヴォルテールの啓蒙思想が広まり賞揚され、プロイセンのフリードリヒ2世のような啓蒙専制君主も現れた。これに対しゲーテはフランスの絶対主義を批判し、分権的な領邦国家体制の下で市民層が成長して文化の担い手たりえたドイツの現状を擁護しつつ、個人の解放と、啓蒙思想が重視する理性に対する人間感情の優越を主張する文学運動である疾風怒濤を起こした。この運動は19世紀のロマン主義の先駆となった。

III

5 10 15 20 25

大躍進政策の失敗を背景に毛沢東に代わって劉少奇が国家主席となると、鄧小平とともに調整政策を推進して混乱の収拾に努めた。これに反発した毛沢東が復権を狙い、軍代表の林彪と文化大革命を起こすと、毛沢東に忠誠を誓う学生の紅衛兵らが各地で騒乱を起こした。社会が混乱するなか、劉少奇や鄧小平は資本主義の道を歩む実権派として批判され失脚し、毛沢東の実権が確立した。毛沢東と対立した林彪が失脚すると江青ら四人組が台頭したが、周恩来・毛沢東が死去した後、華国鋒が四人組を逮捕して文化大革命は終了した。その後、鄧小平を中心とする新指導部は「4つの近代化」を推進し、改革・開放を掲げた。人民公社を解体し、外国資本を導入する経済特区を定めたことで中国経済は成長軌道に乗り始めたが、政治的な改革は進まず貧富の差の拡大や官僚の腐敗などに対する不満から学生・労働者たちの民主化運動が起こると、鄧小平は天安門事件で弾圧した。